

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目
Dissertation title

中国青海省黄南藏族自治州尖扎県における多民族村の言語使用状況に関する研究

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation,
Hiroshima University
博士課程後期 教育文化専攻
Doctoral Program Division of Educational Development and
Cultural and Regional Studies

学生番号
Student ID No. D150695
氏 名
Name 周楊措 Seal

本論文は、中国青海省黄南藏族自治州尖扎県の多民族村であるカルマタン村で行ったフィールド調査に従い、村人の言語使用状況とその変化を明らかにしたものである。具体的には、三世代が揃っている家庭で、「漢族のまま」残っている王徳有家、婿が漢族であるチベット族のツィラン家、族内結婚を行なっている回族の王敬民家を事例として取り上げ、各家庭の三世代が漢語青海方言、チベット語アムド方言、漢語普通話をどのように、なぜ使用しているのかを明らかにしている。

本論文は6章で構成されている。

第1章は序論であり、研究の目的と先行研究、研究方法について述べている。

第2章では、青海省の地理的及び歴史的背景に注目しながら青海省、尖扎県、康楊鎮の概要について述べている。そして、さらに調査地であるカルマタン村について村の構成や村で使われている言語を紹介している。

第3章では、「漢族のまま」残っている王徳有家の言語使用状況を考察している。三世代の言語使用状況を示すと、第一世代の王徳有自身の母語は漢語青海方言であるが、そのほかにもチベット語アムド方言を話すことができる。第二世代の長男は、漢語青海方言とチベット語アムド方言の両言語が話せる外来者の夫人（第一世代）が加入したこともあり、漢語青海方言とチベット語アムド方言を流暢に話すことができる。それは、長男が民族中学校に通っていた当時、家庭内の言語が一時的にチベット語アムド方言に変わったという事実からも確認できる。その後、漢語青海方言しか話せない外来者の嫁（第二世代）の加入により、家庭内の言語はもう一度漢語青海方言に戻り、第三世代の母語も漢語青海方言となった。また、第三世代は普通学校に通っているため、漢語普通話も流暢に話せるようになり、家庭外でも漢語普通話がよく使われている。王徳有家の家庭内の言語について特に注目すべきことは、第一世代の王徳有夫妻と、その長男がもともと漢語青海方言とチベット語アムド方言とを自由に切り替えることができていたため、漢語青海方言しか話せない嫁が家庭に加わったとき、その便利さから彼らが家庭内の言語を漢語青海方言しか話せない嫁に合わせたことである。

第4章では、婿が漢族であるチベット族のツィラン家の言語使用状況を考察している。ツィラ

ン家は、漢語青海方言が母語である婿を除けば家族全員がチベット語アムド方言を母語とする家庭である。三世代の言語使用状況を示すと、漢語青海方言に関しては、第一世代のツィランと第二世代の長女はある程度話せるが、夫人と孫はまったく話せない。漢語普通話に関しては、第一世代のツィランは学校教育を受けたことがあるとはいえ、当時の小学校に漢語普通話の授業は設けられていなかったため、漢語普通話は話せない。第二世代の長女とその夫（婿）は九年義務教育を受けたことがあるので、二人とも漢語普通話話すことができる。しかし、通った学校が民族学校と普通学校と異なるので漢語普通話の運用能力には差がある。婿は漢語普通話に堪能であるが、長女は少し話せる程度である。そして、第三世代は7歳の若年であっても、民族小学校で漢語普通話を学んでいるほか、普段漢語普通話のアニメを見ているので、漢語普通話が少し話せる。家庭内の言語については、ツィラン家はチベット族の家庭としてチベット語アムド方言が母語であり、漢語青海方言と漢語普通話の言語能力には限りがある。そのため、漢語青海方言及漢語普通話しかできない婿が入って来ても、ツィラン家が婿に言語を合わせるとするのは難しい状況にあった。また、第三世代はツィラン夫妻が育児し、父（婿）も出稼ぎのため長期間に渡って家を空けているため、日常においてチベット語アムド方言しか使われていない。

第5章では、族内結婚を行なっている回族の王敬民家の言語使用状況を考察している。回族の家庭は普段から他民族との行き来が殆どなく、周囲からは保守的と見られている。言語も母語である漢語青海方言のほかには、漢語普通話しか話せるだけである。その要因は二つあり、その一つ目は早婚と長期間の出稼ぎといった生活習慣にある。回族は未だにイスラム法に従い、早婚の習慣を継承し、結婚後も家計のため夫婦で長期間出稼ぎに行っている。二つ目は、宗教的な原因である。回族は一旦結婚すると宗教生活も始まり、イスラムの祈りは夫婦で行なわなければならないという。要するに、宗教生活が始まると、その規律も守る必要があり、「不浄」なものを食べたり飲んだりしているチベット族や漢族とは接触していないのである。もちろん、商売の時は他民族と接するが、普段の生活では居住地が一緒であったとしても、民族間の交流が少なく、言語的にも他の民族のように多言語的な現象は見られない。

第6章では、王徳有家、ツィラン家、王敬民家三つの家庭を比較するとともに、そこに認められる共通点と相違点を記述し、家庭の言語を決定する要因をまとめている。この三つの家庭の共通点としては、①多民族多言語という社会背景を持っていること、②三世代が揃っていること、といった二点を指摘できる。一方、相違点としては、①民族所属が異なること、②各家庭の各世代の言語能力と言語使用が異なること、といった二点を指摘できる。これらの点から、家庭の言語使用に影響を及ぼしている重要な要因は結婚と宗教であることが分かった。調査地のイスラム教の家庭は主に族内結婚を行なっているため、家庭内の言語には多様性が見られない。一方、非イスラム教の家庭では族際結婚が普遍的に行われており、言語にも多様性が見られる。また、これらの家庭には外来者の嫁と婿によって家庭内の言語にそれぞれ異なる影響がもたらされている。特に外来者が嫁である場合、また嫁ぎ先の義理の両親が自らの言語のほか、嫁の言語も話せる場合、家庭内の言語は嫁の言語に合わせられ、次世代も単一言語話者になる可能性があることが明らかになった。そして、王徳有家の家庭内の言語選択には、村を取り巻く時代背景も反映されている。それは徳有家において、家庭内の言語が漢語青海方言からチベット語アムド方言になり、その後漢語青海方言しか話せない嫁の加入により再び漢語青海方言になっていった変遷はまさにそうである。王徳有家に嫁が嫁いできたときは、学校教育のための外出が増し、村の若い世代の漢語青海方言あるいは漢語普通話の言語能力は上昇していった時と重なる。そのため、漢語青

海方言しかできない外来者がわざわざ嫁ぎ先の言語を学ばなくても、村人とコミュニケーションを取れたわけである。

本論文では、中国青海省黄南藏族自治州尖扎県の多民族村であるカルマタン村の漢族家庭、チベット族家庭、回族家庭を事例として取り上げ、各家庭の言語使用状況を論じた。今後の課題として、外来者（嫁か婿）の言語と嫁ぎ先の言語が一致するかしないかによってどのような言語選択現象が生じ、それが普通的な現象として位置付けできるかどうかを研究する必要がある。

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 word.